

られることをお勧めしたい。ところで、このように1台のカメラで2回撮影をするために、被写体は静止しているものに限定される。自然地理分野ではあまり問題はないかもしれないが、人文地理分野で動く被写体を立体撮影したい場合にはどうしたらよいだろうか。外国製のカメラで2眼を並列に備えた専用カメラがあるが、35ミリフィルムを使用できないという欠点がある。2台のカメラで同時に撮影するという方法もあるが、すべての費用が2倍になるのが難点といえよう。私の場合、A光学製の一眼レフカメラを使用しているが、この会社ではレンズの前に簡単にとりつけられる立体撮影用アタッチメントを付属品として用意しているため、もっぱらこの装置を愛用している。ミラーの組み合わせでハーフサイズの2枚の立体視用写真を撮ることができるようになっており、撮影後は2枚の画像が1枚のスライドにマウントされ、専用のビューアーや偏光グラス利用の映写装置で立体像を再現することができる。地理分野に限らず、例えば野外での動植物の生態写真などに有効であると思われる。私は野外での植物の近接撮影にこの装置をよく利用している。

当教室には浅井先生の購入された偏光グラス使用の立体スライド映写装置が備えられている。1人でも多くの方がこの装置を通して立体視のすばらしさを味わっていただきたいと思う。

娘 の 卒 論

貝 山 久 子

次女は目下大妻女子大学児童学科4年に在学中であるが去る12月20日に何とか卒論も提出したので、あといくつかの期末テストにパスすればめでたく卒業ということになった。

長い間学生さんの卒論製作を脇から眺めて来たが娘の卒論ははじめて（長女は卒業製作が課せられて居りそれはそれなりに大変だったが——）の経験なので、その経緯を記してみたいと思う。

卒論のテーマと指導教官の決定は3年生の秋に早くも行われる。全教官と3年生全員が11月に武蔵嵐山の国立婦人教育会館に一泊して全くフリーな形で学生と教官が話し合いをし、内容によって指導教官がきまる、といっても児童教育学専攻、児童学専攻合せて120人という大世帯のこと故、6人の教官に単純平均しても20人という数になるので、あまり片寄らぬよう調整が行われるようである。かねがね娘の性格からみて、膨大な資料を読んで論文をまとめるというのではなく、自分の足でオリジナルなデータを集めて結論を導き出すような事をやった方がよいと思う、と意見を述べておいた。帰宅して幼児の造形活動を中心としたことをやることに決めた、と云ったが、その他に幼児向けの絵本を作りたい希望をもっていたようである。

大妻の児童学専攻学生は幼稚園教諭と保育士の2つの資格がとれることになっている。そのため3年生で2ヶ所の収容施設と保育園、4年生で幼稚園における教育実習が課せられている。実習園は早くから決まっているので、娘は4年生になるとすぐ園長さんをお願いして週一度対象児（5才児1クラス27名）の観察と実験を行うようになった。

6月には3週間の教育実習があり、その後も引続いて観察・実験は行われた。娘のテーマは“幼児の造形活動と他領域との関連についての一考察”というもので、他領域とは知能・運動能力・社会性

・創造性であり、園で行われたテストや測定の結果を利用したものもあったが、実際に観察や実験を行ったものもある。娘が集めて来た絵はテーマのあるものと自由画の2種類で、すべて説明して絵を画かせクラス27人に1人ずつ話をさせて回収するという方法をとったようである。これらの250枚をこすおびたらしい絵をカメラにおさめるのが亦一仕事で、バカチョンカメラばかり愛用していた娘は大型のカメラの操作を父親からたゞきこまれ、ダイニングの壁にラシャ紙をはり、三脚をすえて一日がかりで撮影したが、この他に大学の接写の設備を利用させて頂きもした。

クラスの中から造形活動の得意な子と苦手な子をそれぞれ5人ずつえらび、実験や測定の結果を勘案して結論を導き出して行ったようであるが、実際に論文の執筆がはじまったのは10月に入ってからのものであった。先生は週に一度時間を作って相談にのって下さったり、書きためた草稿に目を通して下さりもしたようで、先生からお電話を頂くこともあって恐縮したことであった。こうして12月19日の夜というより20日の明け方になって180枚に及ぶ卒業論文が完成したのであった。

娘の出した結論は大ざっぱに云えば造形活動の得意な子供には社会性に乏しく運動能力も劣っているが創造性は豊かであるという共通性があるのに対し、苦手な子のグループには創造性が乏しい事以外には顕著な共通性は見られない、ということのようである。

卒業後は大学院進学を勧めたが、娘は一度現場に出て卒論の結果を応用してみたいと云い、採用試験を受けて合格してしまった。かゝる上は娘の意志を尊重せずばなるまいと思う昨今である。

地理学史の中の「お茶の水」

千葉 徳 爾

お茶の水というのは地名なのだろうか。なるほど大学の名でもあり、国鉄の駅名でもある。しかし、東京都の地名には、どの地図を見ても載っていない。もちろん、橋のたもとの交番の傍には僅かな空地に滴々と流れる泉があって、これがお茶の水の由来だと記されているが、これは上水道から導かれたもので、江戸時代からの泉ではない。「江戸名所図會」には「お茶の水・水道橋」という挿画があって、神田上水を懸樋で神田川を渡している所が示してあるが、これは構造物の名で、地名ではないようだ。

人によっては、この神田川の切割の崖から湧く泉の水が清いので將軍や大名の茶の湯の水に用いられたとか、神田川そのものの水が使われたという人もあるようだが、「江戸名所図會」にはそういう事も書いていない。ずっと下流の一石橋の袂にあった大久保主水の門前の井戸が將軍の茶をたてる水に用いられたとしている。しかし、そんな考証は別として私が明治大学で地理学史を講義しながら、いつも言うのはこのお茶の水の堀割こそ、日本の地理教育界ではじめてフィールド・ワークの指導が行われた場所だ、ということである。

中川浩一助教授の「近代地理教育の源流」によると、お茶の水女子大学の前身東京女子師範と東京教育大学の前身東京師範学校が並んで、いまの東京医科歯科大学の敷地を占めていたが、その師範学校の附属小学校で教えていた27才の若林虎三郎が、「付属の小学校の生徒を引率して学校近くの駿河